

氏 名 宇津木 安来  
ヨ ミ ガ ナ ウツギ アンラ  
学 位 の 種 類 博士 (音楽)  
学 位 記 番 号 博音第322号  
学 位 授 与 年 月 日 平成31年3月25日  
学 位 論 文 等 題 目 (論文) 日本舞踊における体幹部の技法分析および基礎練習法の提案  
ーモーションキャプチャシステムを用いてー  
(演奏) 長唄 娘道成寺

論文等審査委員

主査	東京藝術大学 准教授 (音楽学部)	露木 雅弥
副査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	萩岡 松韻
副査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	関根 知孝
副査	東京藝術大学 教授 (美術学部)	長谷部 浩
副査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	植村 幸生

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、日本舞踊の女踊りで特に重要な「体幹部」の、特に“胸”と“腰”の技法について明らかにし、日本舞踊の教育・伝承への貢献を目指すというものである。本研究は、2部構成となっており、全5章で成っている。

第1部は、第1章～第4章から成っており、モーションキャプチャによる「体幹部」の技法分析についての内容がまとめられている。第1部の目的は、東京藝術大学のレッスンを通して特に難しいと感じた、“胸”と“腰”の技法について、指導言語の背景にある具体的な動き、および熟練した舞踊家である東京藝術大学日本舞踊専攻の准教授である露木雅彌(芸名：花柳輔太郎)先生の動きの特徴を、モーションキャプチャを用いて客観的に明らかにするというものである。

第1章では、モーションキャプチャを用いた本研究の概要をまとめた。ここでは、本研究で使用している光学式モーションキャプチャについて、測定環境について、データ出力について、データ分析について、被験者について、測定内容とその理由、対象動作の設定、研究上の仮定などについて書いた。

第2章では、本研究におけるモーションキャプチャ研究の手順をまとめた。ここでは、モーションキャプチャ測定までの手順、使用カメラとマーカの決定手順、モーションキャプチャ測定当日の手順、データ編集の手順について書いた。

第3章では、モーションキャプチャを用いた“胸”の技法分析の内容をまとめた。ここでは、日本舞踊の身体技法のうち、“胸をくる”・“胸を落とす”という指導がなされた“胸”の技法に注目し、指導言語の背景にある実際の“胸”の動きについて、モーションキャプチャを使って分析した。また、熟練者の動きの特徴について、被験者間の動きの比較から明らかにした。被験者は、東京藝術大学日本舞踊専攻の准教授で熟練した指導者・実践家である露木雅彌(芸名：花柳輔太郎)先生と、東京藝術大学日本舞踊専攻の学生2名の計3名で行った。分析の結果、“胸をくる”・“胸を落とす”という指導言語の背景にある具体的な“胸”の動きが明らかになった。また、時間・空間を十分に使いながら、より大きな表現を可能にしている、熟練者である先生の胸の違いの特徴が明らかになった。

第4章では、モーションキャプチャを用いた“腰”の技法分析の内容をまとめた。ここでは、日本舞踊の身体技法のうち、“腰を動かすな”・“腰を安定させろ”という指導がなされた“腰”の技法に注目し、指導言語の背景にある実際の“腰”の動きについて、モーションキャプチャを使って分析した。また、熟練した指導者であり実践家である露木雅彌(芸名：花柳輔太郎)先生と、生徒4名の実際の“腰”の動きをモーションキャプチャにより比較した。被験者は、東京藝術大学日本舞踊専攻の准教授で熟練した指導者・実践家である露木雅彌(芸名：花柳輔太郎)先生と、東京藝術大学日本舞踊専攻の生徒4名の計5名で行った。「腰の中心」と「腰の周囲」という概念から、総移動量とXYZ座標における動きを分析した結果、指導言語からただちに推測されることとは異なり、熟練した指導者であり実践家である先生の“腰”が極めて動的な状態の中で安定的に使われていることが明らかになった。この結果から、技法および指導言語の新たな解釈について考察した。

第二部は、第5章から成っており、第一部で得られた知見と、熟練した舞踊家である東京藝術大学日本舞踊専攻の准教授である露木雅彌(芸名：花柳輔太郎)先生に対するインタビューによって得られた知見をもとに、日本舞踊における「体幹部」に関する基礎練習法の提案を行うというものになっている。第5章では、第1部のモーションキャプチャによる分析を通して、無限にある日本舞踊の具体的な動きを支える、より本質的な能力を鍛えるにはどうしたら良いのか、より本質的な脳の認識の部分を変えるにはどうしたら良いのか、といったことに対するヒントを得、第2部では、モーションキャプチャを用いた動作解析における基本的な考え方や、インタビュー調査によって得られた基本的な考え方から、日本舞踊の「体幹部」に関する基礎練習法の提案を行った。

本研究を通して、これまで学術的にはうたえなかった日本舞踊の豊かで高度な身体文化としての特徴を、一部ではあるが、より合理的に、より幅広い分野に向けて訴えていくことが可能になったのではないかと考えている。この事は日本舞踊だけでなく、日本の身体文化研究全体に新たな視座をもたらし、他の身体分野との活発な議論を喚起することに繋がる期待があると言えるだろう。研究を行うにあたり、最初は、モーションキャプチャという機械を通して日本舞踊を見ようとする事、そのような新しい方法で日本舞踊を分析することによって、日本舞踊の奥深さや深淵さを損なうことになってしまうのではないかと、そうなるのであればどうしよう、という気持ちを抱いていた。しかし、いざ研究を実際に行い、分析し、結果が出てみると、日本舞踊の奥深さや深淵さ、先生の動きの繊細さや素晴らしさをよりいっそう、深々と実感することとなった。

本研究で蓄積されたモーションキャプチャによる三次元的データは日本舞踊の身体技法のデジタルデータとしての貴重な資料となり、この資料を活かし、分析方法を発展させることで、過去の名人たちの技法の解明とその習得に繋がり、伝統文化の保存・継承の新たな方法論となることも期待されると考える。また、研究資料やデジタルアーカイブとしての資料としての利用だけでなく、舞踊譜への応用、舞台演出への応用など、様々な活用法があるだろう。

(総合審査結果の要旨)

1月14日 本学第6ホールにて(宇津木安来 博士リサイタル )を行った。構成は実技「長唄 娘道成寺」を上演、その後研究発表という形式。

「娘道成寺」は 日本舞踊において女型の集大成といわれる作品で、生娘が女性として成長し、様々な経験を経て裏切られ、怨みは蛇体となって川を渡る・・・という 高度な身体表現が求められる大曲だが、今回申請者の研究課題 「体幹部の技法分析」を具現する為、身体が厚く覆われる歌舞伎本衣裳を避け素踊りでの上演とした。年齢的・技術的に未だ鍛錬の余地は多くあるが 研究の根源となる胸使い、腰使いは一定の安定感を持って堅実に演じていた。

論文 「日本舞踊における「体幹部」の技法分析 および基礎練習法の提案-モーションキャプチャを用いて」本論文は 序論 本論(5章構成) 結論から成っている。

序論では体幹部を研究対象とする必要性 モーションキャプチャを駆使する意義と可能性を示し、本論 1章2章で実験の設定と手順を説明。3章で胸の使い、4章で腰の動作について、申請者自身を含む数名の被験者( 熟練者 院生 学部生)のモーションキャプチャを使った三次元のデータを綿密に詳細に数値化し比較する。一方で、現行日本舞踊の指導言語である「腰が安定する」「胸を落とす」「胸をくる」などの通常概念として感得が難しく、指導者にとっても言語化しにくい曖昧な口伝をモーションキャプチャのデータと対照させ 数値の裏付けとともに明らかにした。5章ではそうして得た知見と発想に基づき、基礎練習法を考察・提案した。

初めて日本舞踊の奥義をデータ化する事に成功した本研究はすでに複数の学会賞を獲得する評価を得ている。そして研究によって蓄積された大量のデータは、この先本論文以外にも様々な研究の重要な資料の一つとなり、また研究材料として大いに活用できる可能性を持つと考えられる。

舞踊する肉体内面的な運動を明示した事は、新たな指導法・教授法の有意義な参考資料となることを大いに期待する。

5章の練習法の説明不十分な部分は画像を加えるなど確実に補填し、さらに稚拙な表現や言葉使いの訂正を行った上で提出することを確約し、協議の結果、合格とする。